

つ
む
じ
と
君

J
山
B
作

いつだって記憶にあるのは後頭部だった。

鍵を刺し玄関を開けて入る君。

不規則な音を奏でる台所の君。

抱きしめると胸に顔を埋めたがる君。

愛が冷めて僕の前から居なくなる瞬間の君。

恥ずかしがらずにもっと顔を見つめられれば良かった。
もっと名前を呼んで色々な表情を見られればよかった。

いつだって思い出すのはシャンプーと少しの地肌の香りだけ。